

# セラピーグループに特有な言語化の過程 —多元コード理論とグループメイトリックス—

## Processes of Verbalization Characteristic of Therapy Group: Multiple Code Theory and Group Matrix

西村 馨 NISHIMURA, Kaoru

● 国際基督教大学  
International Christian University

 **Keywords** 多元コード理論, グループメイトリックス, 指示過程, セラピーグループ, 解離  
multiple code theory, group matrix, referential process, therapy group, dissociation

### ABSTRACT

セラピーグループにおける言語化を多元コード理論の視点から検討するために、グループメイトリックスの分析とその多元コード理論的意味を考察した。多元コード理論では言葉にならない情緒の根源には情緒スキーマの解離があると見る。グループメンバーが相互に行う多次的・並行的コミュニケーションの中でも、治療過程に関連するものを考察した。ミラー反応を通して、メンバーは解離された情緒を体験する。それに基づく特徴的な対人関係パターンの検討から解離されていた情緒の指示過程の進展が生じる。一方、自分自身が意識できないことがらを他のメンバーがつかむ場合には、代理的指示過程の作業とそのフィードバックによって、自分自身の指示過程へと進めることができる。セラピストは、個人的体験に基づく反応とメンバーからの言語的、下象徴的過程への反応とを区別し、指示過程に参加することで治療過程を展開することができる。

To examine the verbalizing process in a therapy group from the viewpoint of multiple code theory, this study discusses the analyses of the group matrix and their meaning for multiple code theory. Multiple code theory sees the dissociation of emotion schema at the bottom of unspeakable emotions. Among multiple and parallel communications that group members conduct among each other, those related to therapy process were examined. Group members experience their dissociated emotions through mirror reaction. Serial progress in

the referential process takes place by examining interpersonal patterns that are characteristic of the dissociation. On the other hand, in case other members grasp the emotions that someone else is not aware of, the referential process within goes forward by vicarious referential process and feedback from others. Therapists can evolve the therapy process by joining the referential process through differentiating the reactions evoked by their personal history from the verbal or nonverbal subsymbolic process of the group member.

## 問題と目的

グループセラピーはグループにおける対人関係を用いて心理的不機能状態や人格機能の改善を試みる手法である。対人関係や対人コミュニケーションがどのように貢献するのかという点については各学派からのさまざまな議論がある。例えば、精神分析的集団精神療法の立場からは、当然転移の問題に焦点が当てられ、それへの解釈が強調される (Rutan, Stone, & Shay, 2007)。一方、対人関係学派の Yalom (Yalom, 1995; Yalom & Leszcz, 2005) は「対人学習」の治療要因、すなわち対人関係を通して自分自身の行動パターンを知り、改善するという過程を強調している。しかし近年では、さまざまな学派にまたがる「非特異的要因」としての関係自体の持つ効果が指摘されている (Burlingame, Fuhrman, & Johnson, 2002)。このことは、特定の活動の過程なのか、関係それ自体なのかという二分法的な議論を提示しているようにも見える。しかしそのようにとらえることは不毛になりかねない。

Pinney (1993) は、「精神療法とは、医師—患者関係のすべてである。そこには、臨床家の物腰、態度、応答性、敏感性、感受性、共感性、機知に富んだり乏しかったりする言語的・非言語的コミュニケーションといった事柄が含まれる。このようなメイトリックス<sup>1</sup>の中に落ち着いていると、身体検査、診断的処方、治療的処方、そして科学技術でさえもが、有効な精神療法効果をもたらすことがある」という Wallace (1992) の言を引用して、関係の中にあるすべてのことから精神機能が影響を受けることを強調した。「セラピストは訓練によって (中略) とどめの一撃を加える好機を決定できるようになる。しかし患者の変化には、

訓練によって決定されるセラピストの部分的メイトリックスだけでなく、セラピストの全メイトリックスが関与しているのである」 (Pinney, 1993, p. 150)。すなわち、全メイトリックスの中には個人的な価値観や外見、しぐさなどすべてが含まれ、それらは相互に不可分な混然一体となって存在しているのである。

集団分析 (Group Analysis) の創始者 S. H. Foulkes においては、この考えがより明確である。「メンタル・メイトリックス (mental matrix) としてのグループ、すなわち個人メンバーたちのすべての相互作用からなる操作的関係の共通基盤としてのグループという考えは、治療の理論と過程の中心に位置している。この枠組みの中ではあらゆるコミュニケーションが生じており、非常に複雑な反応やコミュニケーションが生じるその場所は、いつでも無意識的理解の宝庫だからである」 (Foulkes, 1965, p. 110, 筆者訳)。さらに、コミュニケーションの一方の端には不明瞭な症状 (遠いところにある原始的なもの) があり、もう一方には言語的イマジリーの表象 (意識的表現で明瞭な様式を持つもの) があるとした。その上で、「この二つの間にある、言語化に至る複雑なステップの連続線を切ってみよう。するとそこには、あるメンバーの持つ無言の症状の意味が言語的表現の形式を取って他のメンバーに理解されるようになるまでの多くの複雑なプロセスがあり、それぞれの役割を果たしていることが見えるだろう」 (Foulkes, 1965, p. 111, 筆者訳) と論じた。そして Foulkes は、セラピーグループはメンバーが参加し、意識的、無意識的領域のすべてに及ぶ相互理解の仕方を学べることに意義があるとしたのである。彼は、グループ参加者が持つ、グループの人びとから理解されたい、彼らと結びついていたいという欲求を

本質的なものだと考えていた。「理解する・されること」と「関わること」は不可分なのである。

さて、コミュニケーションにおける言語化への複雑な過程という難問に関して、とりわけ精神分析諸学派が転移とそれへの反応としての逆転移に焦点化することに対して、さまざまな議論がなされてきたが、それらに対する Ormont の議論は注目に値する。Ormont は、これまでの議論の煩雑さや概念上の混乱を指摘し、転移、セラピストの転移、逆転移（患者の転移に対するセラピストの反応）を区別した上で、現実反応（reality reactions）に注目した。そして、セラピストの感情の働きを明確にして、重視した。「理想的には、われわれの感情は理解の決め手になる道具であってほしい。しかし実際には混乱が整理された程度にしか役立たない。できるだけ現実反応に反応し、特定の個人的歴史から生じる混乱に反応しないようにする必要がある。（中略）理論を最大限単純化しても、実際にはセラピストが感情を識別し、用いていくことは、生涯にわたる内省と作業の主題なのである」（Ormont, 1992, p.54, 筆者訳）。Ormont の提示した事例は後に紹介するが、彼の主張は転移を否定するところにはなく、どのような関係的事象であろうと、グループで生じるさまざまな過程をより包括的にとらえる視点を提供すること、そしてそこでのセラピストの仕事の明確化にある。すなわち、理解と関わることの中核には、セラピストが感情を用いることがあり、それがグループメンバーの体験の言語化に寄与していくのである。その視点は、セラピーグループの重要な土台となるだろう。

このような、グループでのコミュニケーションが言語的な明瞭な形式を取るに至る過程を説明するものとして、Bucci による多元コード理論は有望である。それは、精神分析の身体過程と象徴化、言語化の過程に関する理論を現代心理学、認知神経科学の視点から再構成したものである。またそれは、後に詳述するように関係状況における転移現象を含んだ包括的なモデルであり、これまで述べてきたような見解と一致している。そのため、セラピーグループにおける言語化の過程に新たな

視点を提供する。その際、個人療法とは異なるグループ特有の変数としてグループ内コミュニケーションを考慮する必要がある。そこで、上述したグループのメイトリックスの働きに注目する。グループメイトリックスを多元コード理論からとらえることで、メイトリックスの概念をより詳細に検討していく可能性が提供されよう。本稿では、事例に見られる言語化の過程に及ぼすグループメイトリックスの働きを多元コード理論から検討する。

## 理論：多元コード理論に基づいた情緒的コミュニケーションのモデル

まず多元コード理論の重要な構成要素について粗描する。多元コード理論によれば、思考、情緒的なものを含むコミュニケーションは3つの基本的形式によって生じる。すなわち、下象徴・非言語的（subsymbolic nonverbal）形式。これは情緒の中核にある感覚的・身体的経験のコードである。次に、象徴・非言語的（symbolic nonverbal）形式。これはすべてのあらゆる感覚におけるイメージリーのコードである。そして、象徴・言語的（symbolic verbal）形式。これは言語と論理のコードである。各コードは部分的にしかつながらない。そのつながりの過程を指示過程（referential process）と呼ぶ。適応的な人格機能は、自分を理解して人に伝えられるような、その多元的システム間の適度な統合によっている。

一方、精神病理は情緒スキーマのさまざまな構成要素間の解離によって生じるだけでなく、解離を修復しようという試みによっても生じる。患者は衝動的な行動化、身体化によって情緒の活性化を表現したり、さほど脅威にも懲罰的にもならない別の対象に置き換えて結びつけたりする。指示過程の失敗は苦痛なものであり、「患者は常態となった極端な情緒的隔離状態へと戻っていく」（pp. 55）こともある。

一方、心理療法過程において指示過程が最適に働けば、その過程はセッション内で、そして数セッションにわたって繰り返され、身体的システ

ム、情緒システムにまで到達するようなより深い理解と変化が促進される。そのサイクルをBucci (1997, 2007) は、覚醒化（関係状況における下象徴過程の活性化）、象徴化（覚醒化した下象徴過程に関連した連想や再演（enactment）の出現）、再体制化（言語による熟考、整え）、反復（新たなパターンによる実行、ワーキングスルー）の4位相で説明した。

そのような個人内の指示循環を基に、Bucci (2001) はArlow (1979), Reik (1948), Ogden (1994), Bollas (1987) を始めとする精神分析家たちの仕事に基づいて情緒的コミュニケーションの通路を説明した（図1）。以下に、この過程を説明する（Bucci, 2001, pp. 61-63）。

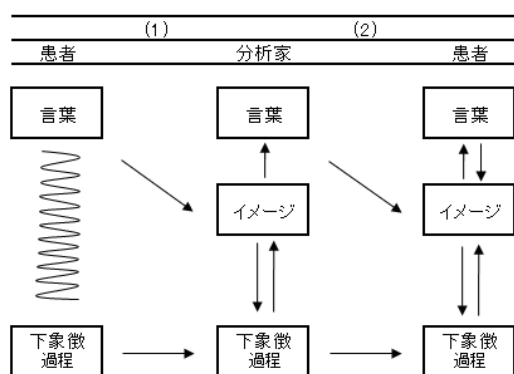


図1. 治療における情緒的コミュニケーション過程（Bucci, 2001, 西村訳）

患者の情緒スキーマ（感情の核と対象表象、相互作用の表象などが結びついたセット）がセッションの中で活性化される。これは解離や置き換えによる活性化である。すなわち下象徴的過程の感情核が喚起されているが、意味をもたらすような対象表象やイメージとはつながっておらず、言語的発言はスキーマの感情核からは解離している。

同時に（図1の（1）の部分）、患者はスキーマの感情核を下象徴的形式で、Reikが分類したような無数の方法で直接的に表出している。

患者の言葉と下象徴的表出は多元的に並行したルートによって、セラピストの感覚的、身体的経験を直接的に活性化する。セラピストは自分の情

緒スキーマ間のつながりが無傷で作用している程度にイマジェリーを産出し、それを熟考して、内的な活性化状態についてのある情緒的理解に到達する。つまり、自分自身の経験の内的変形に基づいて、患者自身にはとらえられない患者の状態の理解を推測するのである。

セラピストは、患者に欠けているイマジェリーを活性化し、指示過程を進行できるようなやり方で介入していく（図1の（2）の部分）。イマジェリーは、下象徴的内容を象徴化し、つながりを言葉にしていって指示過程の要となることが多いからである。その言葉が効果的であれば、患者が自分自身の身体的、感覚的な経験と結び付けるような患者自身によるイマジェリーを喚起するであろう。それに基づいて自らのナラティブを生み出すことができるのである。

治療作業がうまくいくなら、患者は情緒的コミュニケーションのサイクルが成功裏に完了したことを示すようなやり方で反応する。それは出現するストーリーやイメージといった象徴的形式でも、動き、声のトーン、内的状態に代表される下象徴的形式でも表われる。

このように、Bucciの多元コード理論は転移現象ということに限定せず、さまざまな関係の状況で顕在化してくる情緒スキーマ間の解離を問題にし、それが象徴・言語コードと結び付く過程を治療の過程としている。コミュニケーションが多元的・並行的に生じていると考える点、そして、自分自身および他者が、その個人の身体的な（多元コード理論で言う下象徴的な）過程を理解できる程度に言語化がなされているという考えは、無意識的なものを含めて相互理解を展開しようとするセラピーグループに関するFoulkesの考えと類似している。またこの情緒的コミュニケーションの通路の理論は、セラピストの感情の意義のみならず、イマジェリーや言語とのつながりが説明されている。そこにおいてセラピストの感情体験に解離がなく、無傷である分だけ患者の体験をとらえることができる点とOrmontの指摘と一致する。さらに、時として非常に重要な意味を持つセラピストのファンタジーや夢などの現象も決し



て神秘化せず、特定の過程が同定されないにせよ、下象徴コードの過程であるとして説明しているのである。

## 事例

上に述べた理論を踏まえ、セラピーグループに見られる特徴的な情緒的コミュニケーションと言語化の過程を示す事例を提示し、検討する。

### 1. セラピストがメンバーの下象徴過程によるメッセージを受け取る例

〔事例1〕あるセラピストがグループである男性の首を絞めたいというファンタジーを繰り返し体験すると報告した。そのいわば犠牲者はいつも笑っており、自分の人生がうまくいっていると公言し、セラピストとグループを称賛さえるような男性であった。

ある日、このメンバーが次のセッションには来ないといい、ひと財産食いつぶすくらいのカリブ海での休暇の計画を大喜びで説明した時、セラピストは椅子から立ち上がって彼のところに歩み寄りぶん殴るという生々しいファンタジーを体験した。そのファンタジーの中で、セラピストは腐った政治家を葬り去るクリント・イーストウッドのように感じていた。

おかしなことに、このケースではセラピストはこのメンバーに対して怒りを感じていなかった。ただファンタジーを持っていただけであり、その背後にある攻撃性は容易に推測できるものだが、感じられることさえなかったのである。

セラピストはこのファンタジーを検討し、自分が軽蔑とともに扱われていることに気付いた。患者は彼に言っていた。「あんたは単なる気晴らしみたいなもので、お気に入りでも何でもないんだよ。」

この気づきを用いて、セラピストは同じような中傷にこれ以上耐えることはとても無理だとわかった。そこでこの男性がやっていることを、自分自身に対してと同様にグループに気づかせることを促進した。それによって全員が多大なものを得た (Ormont, 1992, p.62, 筆者訳)。

〔事例2〕女性のセラピストが、突然お葬式に出席するというファンタジーを持った。しかし、死が浮かぶような理由が見当たらなかった。自分のグループのメンバーたちが大好きだったし、ちょうど今も感じよく話しが続いているのであった。

最初彼女はそのファンタジーを忘れようとした。しかし何度も繰り返し現れるので注意を向けないわけにはいかなかった。

メンバーのことを検討しているとある患者、マーサがとりわけ静かであることに気付いた。セラピストには理由がわからなかったが、この事実について話した。「マーサ、ずっと黙っているようですが」。

それ以上揺さぶる必要もなく、マーサは突然大泣きし、自分の姉がこの週に死んだのだと言った。マーサはグループには言いたくなかった。憐憫の情をほとんど恐怖症的なまでに信じられず苦しんでいたためである。しかし、彼女はメンバーに言った。もっと正確に言えば、セラピストに「言った」のである。

このケースでは、セラピストのファンタジーによって深い話し合いが始まった。マーサの愛した亡くなった姉のことについてだけでなく、自分が必要とするもの、すなわち最大限の思いやりの表現をグループから得ることが難しいというマーサの問題について、である」 (Ormont, 1992, pp. 62-63, 筆者訳)。

先述の通り、Ormont (1992) は、セラピストが患者の感情をキャッチするためにセラピスト自身の感情に注目する必要性を指摘した。感情が主要部分であるが、それに加えてファンタジー、夢、白昼夢、連想の役割を指摘した。上の2インシデントはその具体例である。

事例1は、特定の男性メンバーの発話と下象徴過程によってセラピストが感情を体験しないままイマジェリーを喚起された例である。そのメンバーの中でも、感情核と発している言葉との間の解離があったと推測されるが、セラピストも他のメンバーも同様に解離していたことが興味深い。セラピストがそのイマジェリーと自身の感情との

連結に成功した時、セラピストの中にメンバーの内的状態に関する認識が生まれ、治療的介入を行うことができたのだと言える。

事例2は、メンバーの発話を経由せず、下象徴過程のみからイマジェリーを喚起され、セラピストが特定メンバーの内的状態をとらえた例である。その際、セラピストが自己内探索をし、グループから喚起された体験であることを冷静に見極めているところが興味深い。このメンバーの体験は、一見すると解離によるものではなく一時的なショックによって生じた自然なものにも思えるが、そうであればむしろセラピストはファンタジーを持つ前に、もっと明瞭に気づけていたであろう。マーサの憐憫に対する強い不信感のために、自身の悲劇的状况における感情を解離させ、すぐには見えないものになっていたのである。

## 2. メンバーが他のメンバーの解離に気づいてフィードバックする例

〔事例3〕男女混合の短期集中青年期グループ。男性セラピスト（Th1）と女性セラピスト（Th2）のコ・セラピー。雄介は「自分は不安ではなく大丈夫」を繰り返していた。そのような雄介に、祥子が「なんか印象ですけど、私たちにあんまり興味がないのかなと思って…。話してる内容も、自分の中で言っていて、わからないことが多いような、主語がないのかな、なんか自分で納得してる感じがする」と言った。雄介は「おお」とか「ほー」とか言いながら、「目標をひとつもらいましたね」と反応した。

次のセッションで雄介は、他のメンバーが言った「話をきくとその人が見えて安心する」という言葉に「引っかかる」と言い始めた。「人が見える、と安心する…っていうのはなんか、うーん、なんか耳に残りますね 人が見えたら安心する、人が見えたら？自分の中でそういう人が見えたら、安心するっていう、うーん、ことがない、あんまり体験してないかな」という発話（録音記録をできる限り忠実に文字化した）からは、その衝撃の大きさが感じとれる。Th2が「自分の中に安全感を感じてるんだなってことはすごくよく分かる」

と言うと、雄介も同意した。Th1が先ほどの祥子の「私たちに関心ないんじゃないの」というコメントに言及すると強く反応した。「そうそうそうそう、それは、ずばりそうだと思いますよ。言われたときは。だってそう、なんか、今言ったように、自分の中に求めてしまうと、多分まわりの、だからだから人が見えたら安心するっていうのがひっかかった。（中略）なんか、自分の中で芯がつかまってどっしりしたら、まあ安心だと思う。自分の中で安心。でも、今は何か違うことを感じてる」。

さらに続くセッションで、雄介はあるエピソードを想起した。「うーん。他人がいる安心っていうのがわかった気がする。それ聞くと、なんか、小6とかの修学旅行から帰ってきた時の、家族に会った時とか、ああいうのを思い出す」、「なんか、車で迎えに来たりするじゃないですか。あ、知らないか。あ、それで、あの、見えると安心する。それはあるな、と思ったな」と言っていてかすかに涙ぐんだ。Th2が「いまここにいる感じ」を問うと、「いや、不安とかではない。うん。でも、まあ、なんか居心地がよくなったのは確かかな。そこは、どうなんだろう。まあ、まあ悪くはない。気分は悪くはないですね」。

雄介は最初のうち自己耽溺的に語り、指示過程の水準も低かった。祥子はそのことを指摘するとともに、彼女たちグループメンバーへの関心のなさをも指摘した。それは、裏を返せば彼女からのつながりの求めの表明でもある。そしてこの祥子の言葉は雄介に「届いた」のであり、彼はつながりを体験したようである。このように自己内の指示過程の低さは対人関係の指示過程の低さと並行しており、グループにおいては、理解しようという他者からの働きかけによって指示過程を高めようとする動きが生じる。

雄介が、「耳に残る」「人が見えて」「安心する」という身体感覚的な表現を用いていたことは興味深い。それらは、多元コード理論で言えば、高い具体性（concreteness）を示すものであり、指示過程の循環の初期位相の指標であるからである。こ

れまでメンバーたちを見ようとしていなかったこと、様子たちが「見える」ことで安心していることに気付き始めた。そのようなグループ内体験が家族との再会の記憶を呼び起こした。依存心や安心感に関わる小さな解離を修復した過程であり、それは同時にグループが「安心してよい家族」となっていることを示唆しているのである。

### 3. グループに「なる」体験の言語化

[事例4] 3と同じグループ。グループの初期においてはグループ実体を体験し、自分がそのグループに所属していくという課題を全員が共有するが、そのあるセッションで、数名のメンバーがそれぞれにグループ実体の体験を言語化した。

美雪「もし、今ここで、このグループ誰か一人ちょっと部屋を出たりしたら雰囲気とかバランズっていうか、変わるんだろうなっていうのをちょっと頭の中で想像しました。」

雄介「別に椅子の位置動かしてないですよ。円が近くなった気がする。そうするとなんか安心するのかな。落ち着く。うん、落ち着くと思います。(Th2「Th1のことはどう感じてるの？隣にずっと座ってるけど。Th1が一番落ち着くのか?」) いや、この輪ですよ。輪が落ち着くって言うか。」

綾子「やっぱりこういう場って私苦手かもとか、ネガティブになりがちで。人付き合いに対しても、自分自身に対しても、もう、いつ嫌われるかいつ嫌われるかって思い始めたりして、ホントばかばかしいんですけど、そういう一面もあって。(Th1「うん。全員にすごく好かれるってこともまたない。」) はい。だから、みんなの輪の中にみんなが私を置いてくれてることが私は一番うれしいですね。」

隆夫「僕は逆に、このセッションちょっと不安。っていうのも、ちょっと和んできて微妙にお互いがお互いを少しずつわかってきた段階が一

番不安になるんですよ。で、周りの人が少しずつ安心を少しずつ抱いてきてるっていうのを聞いてると、他の人はどういう人なのかになって意識して、ちょっとずつ不安は薄くなってきて。」

セラピーグループの形成過程ではグループへの所属感が重要な課題となる。グループへの一次的同一化、あるいは「マザーグループ」(Scheidlinger, 1974) の概念で説明されてきた。その過程で、グループの中にいる自分の意識や自己境界感覚の表明が自然に生じる。ここではグループ実体が物理的な人間の「円」や「輪」というメタファーを用いて表現されている。そしてグループへの安心感を分かち合い、凝集性を高めるというグループプロセスが生じている。一方で、そのグループの中に入りきれない自己やアンビバレンスの体験も表明される。グループで表現しきれない自分があることが「壁」や「殻」といったメタファーで表現されることもある。個人は心理的自己空間(西村, 2008)を持ち、それを他者および集団といった別の心理空間との関係の中で調整しながら自己の安全感を確保していると考えられる。それらの体験が身体感覚的言語で表現されることは興味深い。

### 4. ミラー反応

[事例5] 別の集团的青年期グループの事例(Nishimura, 2009)。美香は、対人関係がうまくいかないこと、グループが苦手であるという課題を持ってグループに参加した。最初のセッションで、別のメンバーが涙を流しているのを見て、「泣けるのが羨ましい」と笑いながら話した。「昔はよく泣いていたが、今はもう怒りで返す」と強さをアピールするかのように語った。一方で、また別のメンバーが「女性らしさを追求したい」と言ったのを聞き、「自分も以前は追求していた」と語ったが、その後、女性らしさについての話しに加わることはなかった。強いという印象を与える美香だったが、3セッション目から「グループにすることがいたたまれない」と言い始め、「自分はこんなに気持ちを語っているのに、誰も返してくれ

ない」と不満を募らせるようになった。グループは、美香の「強がり」の裏にある弱さに言及するようになり理解しようとしたが、焦点が別のメンバーに移ると美香は黙り込み、最後には「結局、私の悩みはどうすればいいのか」とぶちまけるのであった。あるセッションでは美香に焦点化して、メンバーが彼女の感情を語らせようとする「感情はない」と言い出し、グループの無力感と立ちちはピークに達した。その次のセッションに、美香はすがすがしい表情で現れ、「自分の中ですべてがつながった。みんなが羨ましかった。泣きたければ泣ける。女性性への関心がなくて、聞くことがなかった」ということを話し、さらに、幼い頃に泣くと両親に強く叱られていたこと、兄が大切にされて自分が放置されて寂しく感じていたことを語った。グループでは最後まで泣かなかったが、グループに最後までいられたこと、つながりを感じられたことを認めた。

涙を流すメンバーによって美香が強く刺激されたことに見られるように、美香はグループメンバーに、涙するという「もうひとりの自分」を見出していたのである。Foulkesは、このような現象をミラー反応 (mirror reaction) と呼んだ。「他のグループメンバーの相互作用の中に、自分自身あるいは自分の一部（それはしばしば抑圧された部分である）が映し出されているのを見る。自分のやり方あるいは自分と反対のやり方で反応するのを見て、自分のことを知るようになるのである」(Foulkes, 1965, p. 110, 筆者訳)。ミラー反応は、自分を知るという強烈な機会を体験する点でセラピーグループにおける非常に重要な過程である。Foulkesは抑圧という用語を用いているが、多元コード理論で言えば、美香の中には依存心や泣くことに関する情緒に解離が生じていたと言えるだろう。そして、それを意識するしないに関わらず、他者の言動に対して下象徴的過程の活性化が生じたのである。その身体的活性化が言葉になっていく過程で、グループメンバーとの間で「見捨てられる」という関係の再演 (enactment) が生じたり、親子関係の記憶の想起が生じたりしたのであっ

た。女性性についての過程も同様である。

## 5. セラピストの「透明性」の例

〔事例6〕近親姦の犠牲者の女性たちのグループ (Yalom, 1995)：私（註：Yalom本人）に対する辛辣な怒りと、女性のコ・セラピストに対するわずかに辛辣でない怒りはたいそう堪えるものだった。あるセッションの終りまで、われわれ二人の経験をオープンに話し合った。私はやる気をなくし、専門家である感覚を奪われていると感じ、グループで試みることにすべてが役に立たず、しかも、不安で混乱していると表明した。コ・セラピストは同様の感情について話した。彼女に対して女性たちが関わる競争的なやり方への居心地悪さと、彼女が体験したかもしれない虐待を暴こうというメンバーたちからの絶え間ないプレッシャーについてである。容赦ない怒りとわれわれへの不信は、過去の虐待を考えれば全くもって理解可能ではあるが、それでもわれわれは叫んだ。「これはあなた方に起こったとんでもないことでしょう。しかしわれわれがやったわけではないんだ！」と。

後になって、このエピソードがグループの転回点になったことがわかった。残虐な儀式的虐待を幼時に受けたという一人のメンバーは相変わらずの調子だった（「あー、居心地悪くて混乱してるんですけど！なんともお気の毒なこと！でも少なくとも、それってどういう感じなのかわかったでしょう」）。がしかし、他のメンバーはわれわれの告白に深く影響を受けたのである。彼女らはわれわれの不快感と彼らの影響力を知って驚き、権威性を減らして、オープンで平等なやり方に関わろうとすることに満足するようになった。そこから、グループはもっと有益な作業位相へと進んだのである。

加えて、「少なくとも、それってどういう感じなのかわかったでしょう」というコメントは、セラピストへの攻撃の隠された理由の一つを明らかにした。すなわち、グループメンバーが被虐待者というよりも攻撃者になることによって、その不当な扱いを示し、統制しようとする営みの例だったのである。(Yalom, 1995, p. 222, 筆者訳)



情緒スキーマが甚大な苦痛によって解離されている場合、その指示過程には多大な苦痛が伴う。その治療に関わるセラピストとの情緒的コミュニケーション、そしてセラピストが体験する苦痛も激烈なものになる。Yalomと彼のコ・セラピストが体験しているように、このことが生じるのは「全くもって理解可能」ではあるものの、その体験は筆舌に尽くし難いものだった。つまりセラピストの側にも解離が生じていたのである。ここでグループのメンバーたちの反応を転移だとして解釈していたならば、血の通わない説明に陥った危険性が高い。むしろOrmontが指摘した「現実反応」の次元で、個人的歪みから自由な反応を返すことが治療的に有効だったと考えられる。すなわち、この苦痛の高まりは治療展開上不可避なものであった。Yalomが指摘するように、彼女らは過去の体験を「伝える」必要があったからである。しかしこのグループで生じた傷つきではなく、現在の関係展開を妨害するような苦痛の活性化である。「あなた方に起こったとんでもないことだろうが、われわれがやったわけではない」という発言は、セラピストが解離を克服して体験を言語化したものであり、叫びという下象徴的メッセージとともに伝え返すことで、このグループでのメンバーたちの下象徴過程を言語と結び付ける営み、すなわち指示過程の進展に寄与したのだと考えることができる。Yalomは透明性という概念で説明しているが、透明性は、いつ、どのような内容の正直さが治療的になるのかという点について、しばしば混乱を招く。多元コード理論の視点からは、このようにセラピストが自身の解離を克服したところで発せられていることが「透明」だと理解することができよう。

## 考察

### 1. グループメンバーの作業：グループメイトリックスと指示過程

Foulkes (1965) は、人間の社会的性質を基本的なものとしてとらえ、セラピーグループにおいては理解し、理解されたい欲求がグループメイト

リックスとなるとした。まさに、このことが「社会的圧力」(Pinney, 1993)として働き、個人メンバーの行動の問題点がグループにおいて明白になっていき、理解を深めるというグループダイナミクスを作り出す。事例3、あるいは事例5で示したように、メンバーは、他のメンバーの発言や行動を「感じとり」、問題提起をする。この重要な過程を理解する際に、Pinneyが指摘したキンドリング (kindling) の考えは役立つ。「キンドリングとは閾下刺激がニューロン発火を生み出す過程であるが、セラピストと他のグループメンバー、そして患者の間の言語的およびその他のコミュニケーションによって生じることと神経学的に対応するものである。ワーキングスルーの一部はキンドリングに類似している。患者は、グループでの自分の行動やグループ外で起こっていることの説明についてのグループメンバーやセラピストの連想からヒントを得る。そしてそのほのめかされた事柄を意識するようになり、その内容が意識化される、そのセラピーグループの中で話し合われるようになるのである」(Pinney, 1994, p.8, 筆者訳)。このようにキンドリングは、グループメイトリックスがメンバーに言語化を促すグループダイナミクス、そして言語化をもたらし神経学的機構を説明する。

このような社会的欲求は指示過程の基礎となる。すなわち、すでに指摘したように、個人内の身体過程（下象徴過程）と言葉との間のつながりの悪さ（低水準の指示過程）は、発話における対人的指示過程の低さを生みだすが、それによって他のグループメンバーには、より深く理解したいという欲求が自然に喚起される。そうでなければグループはつながりが薄いままか、分裂していく。事例3に見られるように特定メンバーが働きかけることもあれば、事例5に見られるように多くのメンバーが特定メンバーに働きかけていくこともある。

Pinneyがキンドリングとして説明した過程には特定メンバーの行動に対する他のメンバーの指示過程の働きが生じている。グループメンバーの連想は、特定メンバーの行動の下象徴過程に喚起さ

れたものだが、必ずしもそれを十分に言語化したものではない。むしろ、その途上にある違和感の体験である場合が多い。しかしそれは「解離のマーキング」として影響を与える。事例3に示したように、そのメンバーがグループ過程の中で体験したことを、マーキングされたものと結びつけるだけで、本人による指示過程の展開が生じることもある。「最後のとどめ」をセラピストが行う場合もあるが、個人的な歪みから解放されて指示過程ができていく程度に、他のメンバーが特定メンバーの代理的指示過程を行い、そのメンバーの指示過程を展開させることもある。いずれにせよ、そのようなやり取りを通して、メンバーは解離されていた下象徴過程を言語に結びつけることができるようになるのである。セラピストはそのようなメンバー間の話し合いの意味を認め、建設的な議論へと導く必要がある。

ミラー反応として提示した例は「解離を映し出す」過程であり、セラピーグループ独自の治療的過程である。それはまた、治療的インパクトの大きいものである。なぜなら、鏡となる対象の存在によってメンバーの解離していた情緒が強く喚起され、自分の課題を体験的に自覚するからである。しかしその体験の意味がすぐさま理解され、言語化されることはほとんどない。事例5に示したように、その情緒の置き換えや行動化、身体化を通して、グループでの特徴的な対人関係を発展させ、問題となった関係のパターンを再演する。その体験は非常に苦痛なものであるが無駄ではなく、そのような関係の展開によって他のメンバーに苦痛の体験を伝達するように働く。そこから他のメンバーの代理的指示過程が展開し、本人の指示過程への展開へとつながっていくと考えられる。

## 2. セラピストの仕事

すでにBucci (2001) が論じた個人療法でのモデルに付け加えて、上に示した事例から、セラピーグループ独自の仕事について述べる。

開始初期におけるグループセラピストの作業で最も重要なことは「グループを作る」ことである。治療構造の運営はもちろん、メンバーの発言を促

し、相互にコメントすることを通して心理的作業を行う風土を醸成し、グループ性を高めることが重要である。トラウマティックな出来事を話しすぎるメンバーは、グループにいることの不安が高く、個人内、対人間の指示過程が展開していない可能性が高い。グループにいること、グループであることに焦点化していくことで作業は適切な水準になり、事例4に示したようなグループにいられる体験への発言が生じるようになる。

メンバーがお互いを理解し、理解されようとすることは本質的な欲求に基づくものである。そのため、セラピストが解釈を多用する必要はない。むしろメンバー同士のコメントを深めていくよう援助することが治療的パワーを高める点でも有効である。お互いのコメントの中には特定メンバーの解離した情緒スキーマの構成要素に対する反応が含まれていることが多く、当該メンバーにそのポイントを気づかせ、内省、議論を続けるよう促すことが重要である。逆に、問題を指摘した側が個人の解離によって認識を歪めている場合もある。セラピストは、そのポイントを見極め、話し合いを後ろからリードする必要がある。

グループメンバーが解離した感情を、下象徴過程を通して（言語的であろうと、非言語的であろうと）セラピストに伝えることがある。それらに対しても解釈の必要はない。セラピスト自身が現実反応であることを確かめ、メンバーに問いかけることで展開しうる（事例1）。セラピスト自身の指示過程が展開すれば、ファンタジーとして受け取ったことがメンバーの解離の状態を理解し、治療展開へと導くヒントとなる（事例2）。

情緒的コミュニケーションの通路という考えは、セラピストが逆転移的な反応を慎むことを前提としつつ、セラピスト内での指示過程がメンバーの指示過程に寄与する過程を描いている。これは同時に、メンバーの解離の度合いが大きければセラピストの作業もまた苦しいものとなることを意味している（事例6）。それでも、Ormontの言う現実反応を重視し、その苦痛を言語によって整理することができた時、グループでの関係的状况が新たな地平を迎えることを示唆している。こ

れは非常に困難な作業であり、熟練を要するものであろう。しかしこの点は実践上非常に重要なポイントであり、今後一層明確にしていく必要がある。

## 結論

グループメンバーは相互に多次元的なコミュニケーションを行っている。治療過程上、言語にならない情緒の扱いが重要になるが、多元コード理論では情緒スキーマの解離に根源があると考ええる。それらは多元的・並行的に伝達される。グループメンバーは、グループのさまざまな対象に自分の一部を見出し、それによって解離された情緒を体験する。そこから進展してきた特徴的な対人関係パターンの検討から解離されていた情緒を言語化する、指示過程の進展が生じる。一方、自分自身が意識できないことがらを他のメンバーがつかむこともある。代理的指示過程の作業とそのフィードバックによって、自分自身の指示過程へと進めることができる。これらの互恵的役割を順次交換することがグループでの作業を特徴づける。グループであること、グループにいる自分の感覚を言語化する過程も生じる。セラピストは、個人的体験に基づく反応とメンバーからの言語的、下象徴的過程への反応とを区別し、指示過程に参加することで治療過程を展開することができる。指示過程を中心とする多元コード理論の視点からグループメイトリックスを理解していくことで、セラピーグループのコミュニケーション、治療過程をより明確にとらえることができるのである。

## 文献

Arlow, J. A. (1979). The genesis of interpretation. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 27, 193-206.

Bollas, C. (1987). *The Shadow of the Object*. New York: Columbia University Press.

Bucci, W. (1997). *Psychoanalysis and Cognitive Science: A Multiple Code Theory*. New York: Guilford Press.

Bucci, W. (2001). Pathways of emotional communication. *Psychoanalytic Inquiry*, 21, 40-70.

Bucci, W. (2007). The Role of Bodily Experience in Emotional Organization: New Perspectives on the Multiple Code Theory. In F. S. Anderson (Ed.). *Bodies in Treatment: The Unspoken Dimension* (pp. 51-76). New York: Analytic Press.

Burlingame, G. M., Fuhriman, A., & Johnson, J. E. (2002). Cohesion in group psychotherapy. In J. C. Norcross (Ed.). *Psychotherapy Relationships that Work: Therapist Contributions and Responsiveness to Patients* (pp. 71-87). New York: Oxford University Press.

Foulkes, S. H. (1965). Psychodynamic processes in the light of psycho-analysis and group analysis. *Therapeutic Group Analysis*. New York: International Universities Press.

Foulkes, S. H. & Anthony, E. J. (1973). *Group Psychotherapy: The Psychoanalytic Approach*. Baltimore: Penguin Books.

西村 馨 (2008). 心理療法におけるフィードバック機能と自己空間イメージ 教育研究, 50, 139-152.

Nishimura, K. (2009). Is love sweet? : Analysis of 'amae' and group therapeutic process. *Educational Studies* [International Christian University], 51, 65-781.

Ogden, T. (1994). *Subjects of Analysis*. New Jersey: Jason Aronson.

Ormont, L. (1992). *The Group Therapy Experience*. New York: St. Martin's Press.

Pinney, E. 井上直子・吉住桂子訳 (1993). 精神活動と神経ネットワーク機能の相互関連性 集団精神療法, 9 (2), 146-153.

Pinney, E. (1994). The matrix-interactive approach for group psychotherapy. *International Forum of Group Psychotherapy*, 3 (3), 7-10.

Reik, T. (1948). *Listening with the Third Ear*. New York: Farrar, Straus and Giroux.

Rutan, J. S., Stone, W. & Shay, J. J. (2007). *Psychodynamic Group Psychotherapy* (4<sup>th</sup> edition). New York: Guilford Press.

Scheidlinger, S. (1974). On the concept of "mother group." *International Journal of Group Psychotherapy*, 24, 417-428.

Wallace, E. R. (1992). A book review of *Persuasion and Healing: A Comparative Study of Psychotherapy* by J. D. Frank and J. B. Frank. *Journal of the American Medical Association*, 268 (8), 1032-1033.

Yalom, I. D. (1995). *The Theory and Practice of Group Psychotherapy* (4<sup>th</sup> ed.). New York: Basic Books.

Yalom, I. D. (2005). *The Theory and Practice of Group Psychotherapy* (5<sup>th</sup> ed.). New York: Basic Books.

## 謝辞

本稿の初稿は2008年6月5日、ニューヨーク地区RAセミナー（アデルファイ大学マンハッタン校）にて発表された。その主催者であり、その真摯な学究姿勢で筆者に多くのものを与えて下さった Wilma Bucci 先生に深い感謝の意を表したい。

## 註

- 1 原語は matrix。ここでは母体，土台を意味する一般語として用いられているが，学術用語として用いられることもあるためそのままカタカナになっていると思われる。